本シリーズの特徴

- 戦前の日本を代表する写真集でありながら、現在入手困難なものを、原本に忠実に完全復刻。
- 世界的に再評価著しい日本のモダニズム写真集を最高の形で再現。
- 写真集という形態の持つ意義を十全に味わえる独特な造本を尊重。
- 全巻に監修者解説。

野島康三「窓ぎは」（「光画」より）

『安井仲治写真作品集』より（「凝視」）

『Japan Through a Leica』より

＊2005年4月刊行開始　以後毎月1点刊行

全6巻＋別巻1　分売可　限定版

監修者略歴

飯沢耕太郎（いいざわ こうたろう）
1954年宮城生まれ。筑波大学大学院芸術学研究科修了。写真評論家。おもな著書に、『「芸術写真」とその時代』（筑摩書房）、『写真に帰れ「光画」の時代』（平凡社）、『都市の視線』（平凡社ライブラリー）のほか、『写真美術館へようこそ』（講談社現代新書）、『私写真論』（筑摩書房）、『同時代写真』（未来社）、『少女古写真館』（ちくま学芸文庫）、『「写真時代」の時代！』（白水社）、『写真とことば』（集英社新書）、『The History of Japanese Photography』（イエール大学出版局）など。ほかに、エッセイ集『歩くキノコ』、絵本『アフリカのおくりもの』などもある。

金子隆一（かねこ りゅういち）
1948年東京に生まれる。立正大学文学部卒。写真史家。東京都写真館専門調査員。武蔵野美術大学非常勤講師。大正・昭和期のピクトリアリズムの研究における第一人者。編著に『植田正治私の写真作法』（TBSブリタニカ）、『定本　木村伊兵衛』（朝日新聞社）など、共著に『日本近代写真の成立』（青弓社）、『インディペンデント・フォトグラファーズ・イン・ジャパン1976～83』（東京書籍）、『The History of Japanese Photography』（イエール大学出版局）など。各美術館での展覧会キュレーション多数。

◎発行

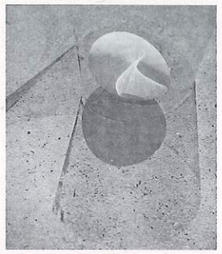
国書刊行会

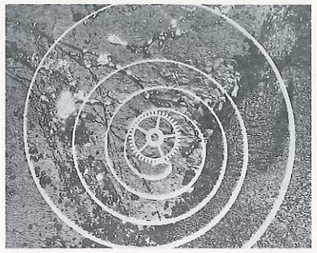
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427
http://www.kokusho.co.jp　e-mail:info@kokusho.co.jp

◎取扱書店

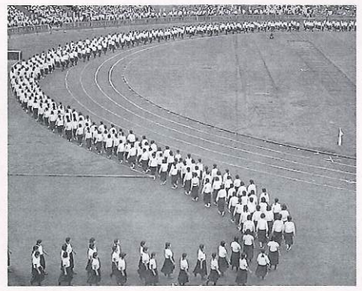
小石清『初夏神経』、
福原信三『巴里とセーヌ』、
そして、『安井仲治写真作品集』——
日本の写真表現における
最初の黄金時代に造られた
傑作写真集の数々が、いま甦る！

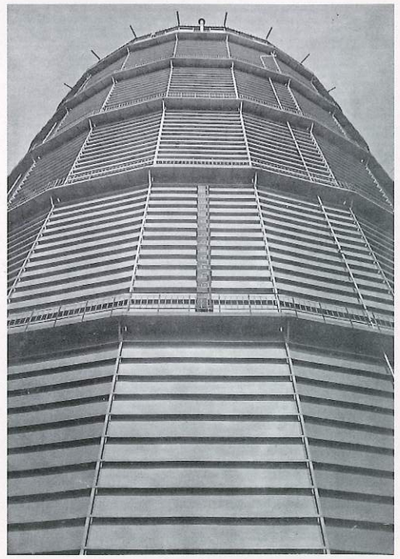
監修＝ 飯沢耕太郎
金子隆一





日本写真史の至宝　全6巻 別巻1





国書刊行会

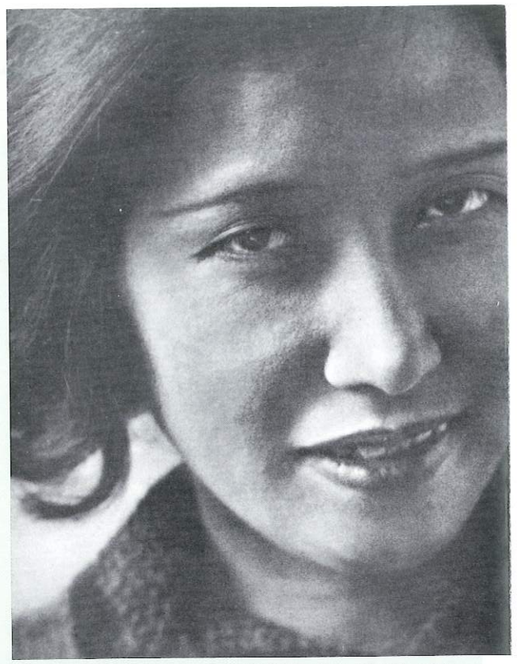
監修のことば

写真表現の青春時代

飯沢耕太郎（写真評論家）

1920〜30年代は、日本の写真表現の歴史においてエポックとなる時代といえる。この時期、ようやく個人的な美意識を表現する手段としての写真の可能性を認識しはじめた写真家たちは、その領域をさまざまな方向に拡大し、多彩な作品を一斉に開花させていった。同時に両大戦間のつかのまの華やぎを享受していたこの時代には、写真を社会的なメッセージを伝達する記号として使用していこうとする試みもさかんにおこなわれた。個と社会、現実と幻想、芸術とプロパガンダ——それら大きく引き裂かれた二極の間を、写真家たちはせき立てられるように渡り切ろうとしていたのである。

福原信三、堀野正雄、小石清、木村伊兵衛、安井仲治、これらの写真家たちの作品集には、写真表現の青春時代をせいいっぱい生き抜き、豊かな実りをもたらしていった彼らの軌跡が刻みつけられている。今こそ、これらの「至宝」をじっくりと味わう時期が来ているのではないだろうか。

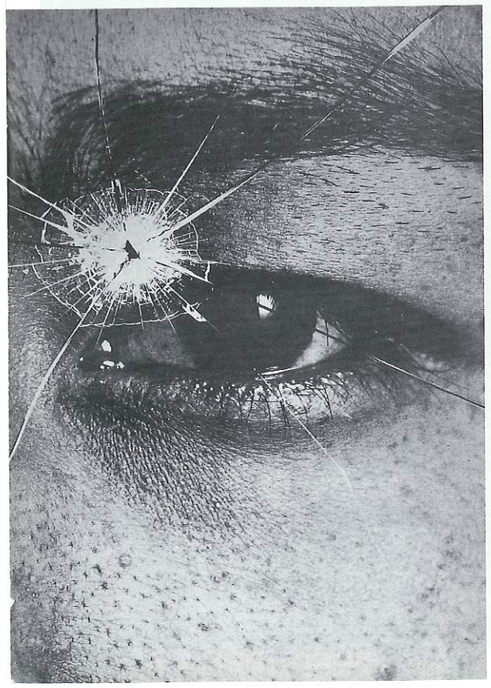


野島康三「女」（『光画』より）

オリジンを手にすること

金子隆一（写真史家）

『初夏神経』より

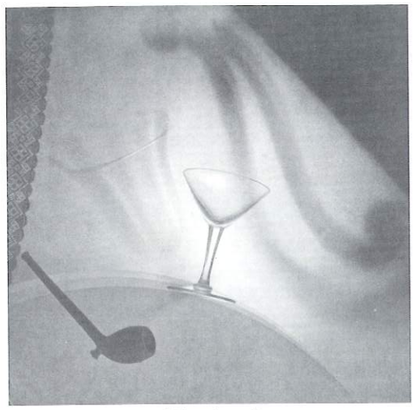


「写真集」というかたちは、それ自体がひとつのオリジナルな写真表現として自立するものである。それは写真家自身によって焼きつけられた一枚のオリジナル・プリントと同等の価値と独自の位置を持つということである。

写真を一冊の書物として上梓することは、19世紀の写真発明の時代にさかのぼれるし、日本においても明治時代に「写真アルバム」として刊行されている。だが、今日につながるトータルなブックデザインとエディトリアル・デザインそして高度な写真印刷をもつ写真集の原点は1920〜30年代における近代的な写真表現の成立の中にはじまる。今回復刻される写真集は、日本の近代的写真表現を語る上で欠くことのできないだけではなく、これまでオリジナルを見たくてもなかなか見ることがかなわなかったものばかりである。印刷はもとより、造本についても極力当時の完全なかたちを再現することを何よりこころがけた本シリーズは、「写真集」というかたちがどのような可能性をもっているのかを教えてくれるに違いない。

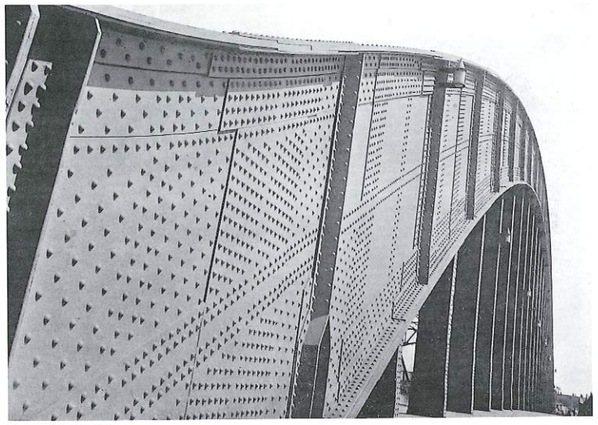
表1写真（左上から右下へ）……『安井仲治写真作品集』より（「犬」）／椎原治「卵」（『光』より）／『初夏神経』より／『巴里とセーヌ』より（「釣り」）／『Japan Through a Leica』より／『カメラ・眼×鉄・構成』より

『Japan Through a Leica』より



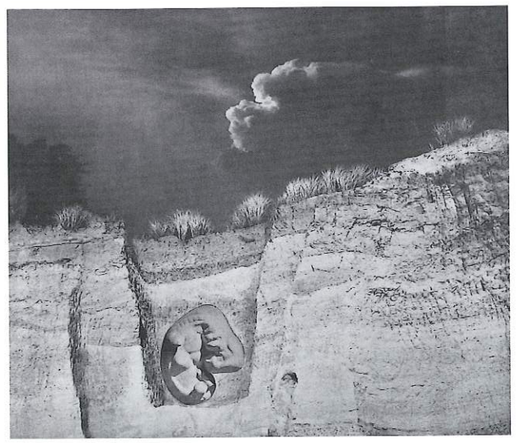
中山岩太「・・・・」（『光画』より）

『安井仲治写真作品集』より（「三人」）



『カメラ・眼×鉄・構成』より

『巴里とセーヌ』より（「博労」）



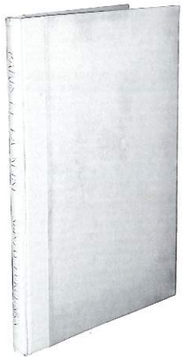
平井輝七「大地」（『光』より）

『初夏神経』より

飯田幸次郎　無題（『光画』より）

巴里とセーヌ

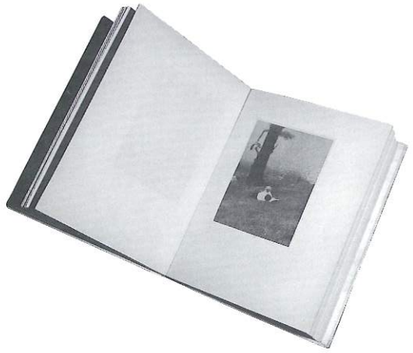
福原信三



「光と其階調」を唱えて日本の芸術写真に新風を吹き込んだ福原信三の処女写真集である本書は、ピクトリアリズムとモダニズムが交差する地点にそびえ立っている。刊行直後におきた関東大震災で、そのほとんどが壊滅したとされる幻の写真集でもある。（金子）

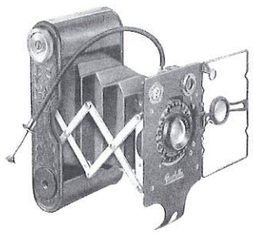
B4変型判・上製　350ミリ×252ミリ　総28丁・うち写真24丁（貼込）
予価35,000円　ISBN4-336-04487-2

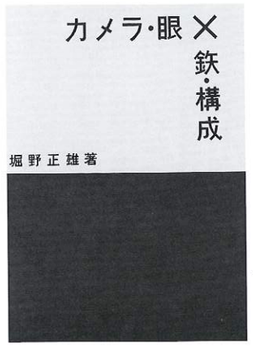
＊福原信三（ふくはら しんぞう）
1884年東京生まれ。子供の頃から芸術に親しむ。1913年欧米留学から帰国し、21年福原路草らと「写真芸術社」を結成、「写真芸術」創刊。23年に『光と其諧調』を発表。24年「日本写真会」を設立し、同会より作品集『西湖風景』（31年）、『松江風景』（35年）などを刊行。1948年没。



カメラ・眼×鉄・構成

堀野正雄





堀野正雄が美術評論家板垣鷹穂の指導の下、機械的建造物をレンズの鮮鋭な描写力と自由なアングルで切り取った写真群は、新興写真と称された日本の近代的写真表現の典型である。簡潔な装丁と構成を持つ本書は、近代デザインのすぐれた成果でもある。（金子）

A4変型判・並製　260ミリ×190ミリ　総84頁・うち写真44頁
予価10,000円　ISBN4-336-04486-4

＊堀野正雄（ほりの まさお）
1907年東京生まれ。学生時代から築地小劇場の舞台写真などを撮り始める。30年木村専一主宰の「新興写真研究会」の同人となり、本書のほか『女性美の写し方』などを出版。報道写真や広告写真の分野でも第一線の写真家として活躍した。1999年没。

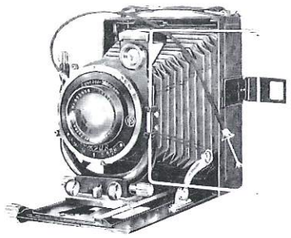
初夏神経

小石 清

浪華写真倶楽部の中心メンバーだった小石清の『初夏神経』には、この写真家の鋭敏な感受性が多彩なテクニックを駆使して展開されている。金属（ジンク）板の表紙という斬新な造本は、その表現意欲の高まりを示すものといえる。（飯沢）

＊小石 清（こいし きよし）
1908年大阪生まれ。高等小学校卒業後、商社の技術部で写真技術を習得。28年「浪華写真倶楽部」に入会し、福森白洋にその才能を見出される。30年頃から、フォト・モンタージュやブレの効果を生かした作品を制作し、花和銀吾らと共に同倶楽部の新しい傾向を示す存在となる。36年には『撮影・作画の新技法』を刊行。1957年没。

A3変型判・表紙ジンク板・スパイラル綴　367ミリ×285ミリ
総25丁・うち写真10丁
予価35,000円　ISBN4-336-04485-6



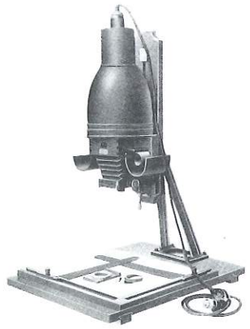
Japan Through a Leica

木村伊兵衛

1937年に開催された「日本を知らせる写真展」をまとめた英文写真集である本書には、ライカの名手として知られる木村伊兵衛の真骨頂が集大成されている。また日本の報道写真が、対外宣伝の方法として変容してゆく一断面を示す写真集としても重要な位置を占めるものである。（金子）

B4変型判・上製カバー装　261ミリ×246ミリ　総112頁・うち写真100頁
予価15,000円　ISBN4-336-04488-0

＊木村伊兵衛（きむら いへえ）
1901年東京生まれ。幼少の頃から写真に興味を持ち、23歳の時に写真館を開業。32年には野島康三、中山岩太と「光画」を発刊。その後「日本工房」や「中央工房」へ参画。戦後は日本写真家協会の初代会長をつとめるなど、日本を代表する写真家となる。1974年没。



光

丹平写真倶楽部

『光』は1930年に創設された丹平写真倶楽部の10周年を記念して制作された作品集である。安井仲治をはじめとして、上田備山、本庄光郎、平井輝七、椎原治など、そこには関西「新興写真」の真髄ともいえる作品が並ぶ。（飯沢）

B4変型判・上製カバー装　278ミリ×221ミリ　総147頁・うち写真111頁
予価15,000円　ISBN4-336-04489-9

安井仲治写真作品集

安井仲治

関西写真界のリーダーであった安井仲治は、1942年に38歳で夭折した。この遺作集には、「眺める人々（猿廻しの図）」、「凝視」など、プリントが残っていない作品を含めて、代表作50点が収められ、彼の生涯を辿ることができる。（飯沢）

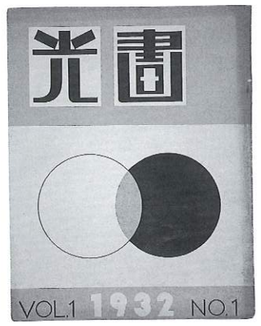
A3変型判・未製本・帙入　406ミリ×300ミリ　総54丁・うち写真50丁
予価35,000円　ISBN4-336-04490-2

＊安井仲治（やすい なかじ）
1903年大阪生まれ。商業学校卒業後、家業の用紙店に勤務するかたわら、早くから写真を始める。22年「浪華写真倶楽部」に入会。28年同会の中心的メンバーである、米谷紅浪、梅阪鷲里らと「銀鈴社」を結成。30年には「丹平写真倶楽部」の設立に参加する。近代的な写真表現のすべての領域において優れた作品を制作した、戦前の日本を代表する写真家。1942年没。

別巻

「光画」傑作集

「新興写真」運動の高まりを受け、野島康三、中山岩太、木村伊兵衛を同人として1932年5月に発刊された月刊写真雑誌「光画」から、全写真と主要な評論・エッセイを収録する。野島の「女」のシリーズ、中山岩太のフォト・モンタージュ作品や、伊奈信男による新興写真のマニフェスト「写真に帰れ」など。



A5判・並製カバー装　総300頁・うち写真182頁　付総索引
予価5,000円　ISBN4-336-04491-0